
縛鎖－バクサー－

馬手男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

縛鎖一バクサー

【Nコード】

N7444Y

【作者名】

馬手男

【あらすじ】

この物語はオリジナル作品です。

初投稿なので暖かく見守って頂けると幸いです。

なお、能力者モノですが、某とあるな学園物の様な作品とは趣が違い、ちよつと特殊です。

どう違うのかは読んで頂ければわかるかと思えます。

【#1】世界は、籠の中に

ここは第五コロニー「希望」の中。この世界は幾重にも重なる、「重層世界」と称される世界の一つで、生まれながらに何か「能力」を持った者が住む世界。

その「能力」とは、基本として以下2つの特徴がある。

- ・研究により、能力には大まかな種類があり、強大さによって、その能力にも変化が起きることがわかっている。
- ・能力を発動すると、その能力に準じた武器や鎧、時に生物などが召喚される。

話は戻るが、「重層世界」には、勿論言語を持たぬ者、人の形相を持たぬ者、無力な者などの住む世界があるが、協定により他世界への干渉が出来ないようになっている。

そして、このコロニー「希望」には、そんな物もあったもんじゃない。

この世界には、終わりが近づいている。人々は、3つの勢力に分かれた。

一つは「保守派」。名の通り終末を受け入れ、自らの生を全うしようとする勢力。

一つは「革新派」。こちらは、終末を受け入れず、世界を終末から救い、再び反映を得ようとする勢力。

一つは「破壊派」。運命に殺されることに憂い、自身で世界を壊し、終わらせようとする者や、好き勝手に暴れ回る乱暴者の集う勢力。

そして、どの勢力にも荷担していないとされる人々もまた、この世界にはいる。

人々は「終末戦線」と、この戦争を呼ぶ。

【#2】未だ開かぬ、籠の中

この時代の学校とは便利になり、机には一人一台のパソコンが据え付けられていて、板書なども転送されてくる。だが、昔の趣を忘れない為か知らないが、授業中の回答は挙手、発言制となっている。

おっと、自己紹介でもしておこう。俺は朝霧政幸。あさぎり まさゆき睦月学園という有名な高校に通う高校2年生だ。相当な「能力」がなければ入学は出来ない。

はつきり言うとは自分は簡単に入学した。なぜなら、

朝霧家はこの世界でも五本の指に数えられる権力を持つ家柄だ。

頭角を現したのは現頭首の父の先代、つまりは祖父なのだが、上流に台頭して日が浅い為か敵視する者も多い。

その血筋あつてか俺自身の能力も相当強かった。最強には毛ほども掠りはしないが、その辺の輩なら力を見せただけで撃退できる。

祖父も父も堅牢な甲冑と両手に携える剣を召喚する「騎士級」の能力者だが、母の所為かその流れを変え「戦機級」という、はつきり言つてとても強力で、それを保有する能力者の数も少ない能力だそうだ。

能力自体はシンプルで、10メートル近くの大きさの機動兵器を召喚、それに搭乗するというものだ。操縦も脳波を完治しての半自動なので、自分の体のスケールが大きくなっただけ。と思えば楽々なのだ。

とまあ、頼まれてもいない解説を長々とした訳なのだが、今はとてもなくヤバい状況下にある。どんなだって？

そりゃあ、授業中寝てて、当てられたのさ。

座学ははつきり言えばダメダメだ。さっぱりわからん。

隣の席からメールで答えが送られてくる。

（馬鹿、やめろ！バレるんだぞ、これ！うわ、送るな！）

「そこ、何やっている！・・・もういい、座れ。後で指導室へ来るように、いいな！？」

こっ तरी 搾られた。

毎度の事だが、やはり疲れる。

「もう、マサ君が居眠りなんてするからだよ。ぶーぶー。」

隣で何か言ってるが、無視しよう。

彼女は幼なじみの露月美悠^{つゆつきみゆ}。赤いリボンのポニーテールと、巨乳がトレードマークだ。

成績は良く、高校生として見ても能力もその力もなかなかで家事全般も出来る上美人と、逸材だ。だが、要領が悪い。そこ、よくある設定とか言うな。

話せば長くなるので割愛するが、露月家は歴史ある名家だ。

そして、彼女の能力は「狙撃級」なのだが格が違い、銃から弓までのお馴染みの遠距離武器から、人間には到底扱えない巨大な砲塔まで召喚、使役できる。

彼女自身でも扱えない大きさの物まで召喚出来るので、それを敢えて出し、それを俺の能力によって扱うという荒業までできる。

俺が座学で弱い分、実技試験をこいつとペアでやったおかげで進級できている。

感謝の言葉も出ないくらいだ。

勿論仲は良いが、恋人だとか、そういう関係ではない。俺としては好みなのだが・・・ゲフンゲフン。

「・・・から、聞いている？ちよっとー？」

「ああ、聞いているよ。聞いている。」

「ならいいけどさ、じゃあ、どこ行こうか？」

「行くって？え、あれ？」

何を言ってるんだこの巨乳は。

「だーかーらー！今日の帰りにどっか寄ろうかー？って話！聞いてないじゃん！」

両手を上げて文句を垂れる。胸が揺れる。いいぞもつとやれ。

「あー。そうか、すまんすまん。じゃ、お前の好きなロイホ行くか。」

「ホント！？行く行くう！」

飛び跳ねる。胸も髪も揺れる。至福。

そうそう、ロイホとは通称で、本当はロイヤルホープと言う。

格コロニーにチェーン展開する、有名な飲食店だ。

美悠はとかくロイホを気に入っていて、何かあっても「ロイホ行くかうか。」で片がつく。なんと扱いやすい。

と言うわけでロイホに行くことになった訳だが、

それは次回だっ！

【#3】ほつれた籠は、穢れた光を零して（前書き）

縛鎖一バクサ一の第3話です。

【#3】ほつれた籠は、穢れた光を零して

空が落ちる。キィともゴウとも言えぬ嘶きを吐きながら。

その有様は感覚阻止の能力によって、当事者しか判別出来ない。

外を見ようにも、内からではただの虚像が視界に広がるだけだった。

「という訳で露月サン。今度のオススメは何デスカー？」

「んふー。よく聞いてくれたねー！えっとねー・・・。」

いつもこの質問から始まる。もう何度目かわからない応酬について口調もあからさまになる。

「これだよ、じゃーん！」

蟹ピラフの味噌和えだった。

ここ、ロイヤルホープことロイホは、その名に違わず貴族や名家の要望を店舗毎だが、聞き入れる姿勢をもっている。

当の美悠は、俺とロイホに来る度に自分が考案したメニューをオススメしてくる。じゃないとご機嫌を取りきれないのだ。

「あ、合うのか？味噌。合わないよな？うん。」

「合うよ！美味しいもん！ただ私が食べてみたことがないだけで、この組み合わせは画期的な味なんだから！」

おおう。食べてないので、露月の姫君は。

「じゃあまず、お前が食べてみる。そこから検討してやる。」

「むー・・・。わかったよ。食べるよ。」

蟹ピラフの味噌和え、到着。

「いただきます！」

あむあむ。と、どう出しているのかわからない擬音と共に、表情が固まり、顔が青ざめてくる。

「うつ。」

なんかヤバそうだ。

(ドッスン。)

なんかおかしな音と共に飲み込んだ。

ついでに聞いてみる。

「どうだ？ 味の方は。」

「不味いよ。うん。でもね？ マサ君。ずっと嚙んでて、飲み込んだらね？ その、不味の通り越して逆に、清々しくなっちゃったー・・・」

「よし、食わん。」

たまったもんじゃない。

そんな物食べられるのは辛うじてこいつだけなのに、俺が食べたら死ぬ！ 死んでしまう！

「やあ、お二人さん。今日も仲良くデートかい？」

うわっ出たっ！

「何の用だ、御門。」

たけつちみかど武士御門。同じクラスのイケメンで、中学時代からの友人だ。

こいつは人当たりは良いが、嫌う人間はとことん嫌う。イケメンが勿体無い奴だ。

だが、こいつとは気も合い、仲良くやらせてもらっている。

因みに、御門の能力は様々な要素を基に練り上げる魔術を用いる「魔術級」と思いきや、剣まで召喚し扱えるという「法剣級」に位置している。

魔術も剣も、専門の能力者に比べればやや劣るが、組み合わせで戦うと、これが中々に強い。おまけに頭も切れる奴だから、能力の使役も上手い。成績も良いと来た優等生だ。

ただ、どうしてか名家の者ではない。

「それにしても蟹ピラフの味噌和えだなんて、また大層おかしな物

を……。どれ。」

「ちょ、お前、やめろ！死ぬぞ！」

何の躊躇いもなく口へと運ぶ、そして一口。

「う、旨い……。何だこの旨さは！この奇抜なメニュー、という事はまた露月さんの考案かい！」

「うん、そうだけど……。美味しいの？それ。」

「勿論さ！もし良かったら全部頂けるかい？何分、不味そうにしてたから……。」

「別に、いいけど……。」

そう、こういう奴なのだ、こいつは。

味覚破綻者で、美悠の考案したメニューを毎度美味しく平らげる。

見ててびっく「うおあ！」「きゃっ！」「何だ！？」

一瞬、激しい激突の様な振動と共に店内が荒れる。

「何が起こったんだ……？」

店内は一部が崩壊している他、異変は無い。なので外に出てみれば、

「なんだ、これは……！」

空が割れている。否、空が『見えている』。

コロニーは丸いカプセル型の構造で、内部には人工の空があり、人工の太陽光が照らし、人々が生活している。そのコロニーは、墜落した。否、落とされたのだ。

破壊派の仕業ではない。何故なら、全てのコロニーが落ちたからだ。

コロニーの大地が割れている。当然だ。コロニーは墜落した瞬間、外壁も内壁も、殆どが粉微塵になったからだ。

しかし不可解な点が残る。

コロニーは墜落した、だが、死者が出ていなかったのだ。

誰一人として。

【#3】ほつれた籠は、穢れた光を零して（後書き）

コロニーの墜落、「希望」を失う世界。

一刻と迫る終末。

世界は、変わるのだろうか。

良くも、悪しきも。何か、変化は起こるのか・・・？

【#4】開いた籠は、『我等の』世界（前書き）

縛鎖一バクサ一の第4話です。

【#4】開いた籠は、『我等の』世界

皆は、地上に降りた。

誰も踏み入った事のない地上へ。

遙か昔、能力者達の争いによって人の住み得ぬ地へと成り果てた地上。

最低限、人が住める環境を取り戻すため、修復用のロボットを送り込まれた地上。

だが、歪んでいた。

4つの大陸に別れ、それぞれが四季のうちの1つを持っていた。

全てコロニーは、その大陸に落ちるよう『仕組まれていた』のだった。

「おいおい、冗談じゃねえぜ……。」

政幸が言う。

「確かにね……。でも、コロニーも大破しちゃったし、ここですぐにかするしかないよ。」

美悠に続けて、御門も言う。

「速報によると、この地上である、『地球』は現在、4つの大陸に別れ、その1つずつがそれぞれの四季を持っているらしい。」

「この大陸は春の様相を持っているようだが、どうなることやら、だ。」

呆れた様子で政幸が文句を垂れる。

「しかしよー。大昔の戦争の後からの復旧は出来てんのか？見る限りじゃ大丈夫そうだけどなあ……。」

美悠が腕を組み、

「きっと大丈夫だよ。それに、何かあってもマサ君が超デカイ戦機出して、その中でマサ君と私だけでも仲睦まじく生活出来ればいいんだからー！もー！」

美悠が身をくねらせながら言う。

それに対し、政幸は言い、思う。

「はいはい、わかったわかった。惚けた事言っていないで現実見ろ。」
(まったく、こいつは本気で言ってるのか冗談なのか、さっぱりわかんねえから困る・・・。)

ふう。と一息つきながら、政幸は近くの切り株に腰を下ろす。

「しかし、あれだな。まずは居住地を作らないとな。物体錬成とか出来る能力者はいるかな・・・？」

不意に。

「馬鹿者！お前は昔からそうだ！」
もう一人、

「何に座っている！少しは考えんか！」

「ぬおあ!？」

政幸は後ろからの衝撃に倒れる。

「政幸。お前が座っていた、この「切り株」！」

「これがあると言う事はどういうことかわかるだろうに！」

政幸は考える。

「確かに・・・結構、綺麗な切り株だよなあ。しかしそれがどうなるって？」

思い、気付く。

「そうか！樹木を伐採出来るような、生物か何かが生息しているかもしれない。って事か！」

そしてもう一つ。

「・・・で、あんたら、誰？」

二人組の少女は、驚愕の色を隠せず、答える。

「政幸よ。お前は、あれか？こんな容姿端麗な女性と甘くい夜を過ごしておいて、忘れるような人間か？」

「口では言えんような、あんな事からこんな事までしといて、そんな美しい女性を忘れる人間なのか？」

後ろで、何やらうーともわーとも言えない叫びと共に錯乱する美悠がいた。

こっちだっけいきなりそんな事言われて、たまった物ではない。

政幸は、肩を掴まれる。

「おいおい政幸い。どういう事だい？」

御門が憤怒の形相を顕している。

御門は、他人の女性関係には何故かうるさいのだ。

特に、こういった話の展開ともなると、怒りがすぐに振り切れる。

「いや、ないない。絶対無いから！俺マジそんな記憶ないから！」

政幸がうろたえていると、二人が言う。

「嘘だからな。」

「ああ、嘘だ。」

「おい。」

と政幸がツッコむ。

「まあ、冗談はさておき、自己紹介と行こう。」

「そうだな、姉上。自己紹介だ。」

姉上。と呼ばれた方が先に言う。

「私は神山優衣。流石に、苗字位は聞いた事もあるう。で、お前が好きだ。政幸。」

「私は神山舞衣。私達は、双子だ。で、お前が好きだ。政幸。」

唐突に、続け様に告白を受けた政幸は、しどろもどろになる。

「こ、神山って・・・あの神山？凄く、凄く偉い。」

「「そうだが？」」

「うん。何で俺が好きとか、そういうのはいいや。うん。・・・で、お二方の能力というのは、如何に？」

聞けば答えは返ってくる。

まずは、優衣からだ。

「私の能力は「魔術級」だ。魔術に於いても、攻撃や防御と言うよりは透視や読心、能力の解析などの特殊な方向に秀でている。あと、そんなに恐れある言い方しないでくれ。タメでよい。」

舞衣が、

「私の能力も「魔術級」だ。しかし、姉上と同じく非戦闘型であっても、また特殊で、人のみならず、生物の精神や肉体の操作や、物体を動かす事が出来る。政幸よ。私達は同年なのだぞ？」

一通り済んだ所で、

「マサ君？お話聞こうか？どこで知り合ったのかなあ？」

(怖！美悠、怖！)

思いながら、

「あ、えと、今日！今日、ここでだ！好かれる謂われも知らん！本当だ！」

美悠は一步、一步と距離を詰める。

神山姉妹が見かねて、助け舟を出す。

「なに、私達が勝手に一目惚れして、勝手にストーキングしてただけだ。深い意味はない。」

「姉上の言うとおりだが、他にも理由があって、政幸が「戦機級」の使い手だった。と言うのもある。」

すまん。と一礼。

美悠は、渋々

「そ、そう・・・なんだあ。えへへ、ごめんね。勘違いして。」御門も、

「神山姉妹がそう言うならそうなんだろう。やれやれ。辛いな、モテる男は。」

「知らん。知らんからな、そんなの。大体ストーキングって・・・ま、良いか。」

あと、と優衣が言う。

「お前の能力について、探りを入れたが不自然な点があったのだ。まず、戦機の形態を自由に変えられる所だ。」

「そして、姉上が申して居た事だがブラックボックスな部分がある。私達姉妹の干渉に於いても引き出せず、解らずじまいだ。それに、」舞衣はまた、付け加える。

「私の能力による精神、肉体両方の操作を受け付けないのだ。本来なら私と同等の能力が無ければなし得ない事なのだがな・・・。」優衣も、また言う。

「最後に、この・・・。美悠と言ったか。こやつ有能力に召喚された武装があるだろう？」

衝撃の事実を言い放つ。

「何故扱えた？本来、他者の能力によって召喚された武装は扱えん筈だ。利用しようものなら、分解されるはず。もう一度問う。何故扱えた？」

政幸にも、わからない事だった。だが、

「わからない。でも、美悠の召喚した武装に初めて触れた時、体に電流が走ったような感覚があったんだ。二度目以降は無かったけど・・・。」一息。

「この間も、きっと優衣達が干渉したときかも知れない。似た感覚があったんだ。俺にわかる事はそれ位だ。」

これはほんの始まりに過ぎなかった。

誰も、一人の少年と、その愛する女性によって「終末戦線」を左右されるとは知り得ぬ事だった。

そして、誰を愛するのかも・・・。

【#4】開いた籠は、『我等の』世界（後書き）

今回は、召喚型ではなく、干渉型の能力者を出しました。
一応、今回の二人も戦闘は出来ますが、強くはありません。
いつか、設定のまとめをしたいです。

【#5】世界は、何を求むのか（前書き）

5話ですー。

ご覧になって下さっている方々、感謝です。
以後も、頑張って参ります。

【#5】世界は、何を求むのか

「それなら、私の推測でしかないですけど、わかるかもしれません・
・。・」

新たな声。

「あ、すみません。私は、ファウトス・L・リーリエです。友人からはリーリイと呼ばれています。」

自分達より一回りか幼げな少女は、丁寧に自己紹介を済ませた。横に並ぶ青年が、

「私はファウトス・M・クロウです。クロウとお呼び下さい。なお、私はリーリエの兄であり、部下であり、後見人です。お見知りおきを。」

リーリエと名乗った少女は、

「では、早速本題に入ります。政幸さん。あなたにもう一つ、隠された能力。それは」
間を置いて、

「「盟主級」です。」

皆、それが何であるのか、そもそも訳がわからない。といった顔をする。

神山姉妹ですら。

続けてクロウは、

「「盟主級」の能力とは能力そのものが強大過ぎて、その他の通常の分類には属することの出来る代物ではない能力です。」

再び、リーリエが、

「ええ、「盟主級」は世界の有り様や理に干渉したり、それを超越出来る物です。その能力は、失礼ですが、神山さん。あなたの様な「通常の」能力者には干渉できない能力なのです。」

そして、

「『盟主級』を持つ者は本来、三つある勢力の盟主、もしくは次期盟主を担うのですが、あなたは何故、一貴族の人間で居られるのでしょうか？」

政幸は、展開が早すぎて追いつけないでいる。

「だが、リリー・・・でいいのか？とにかく、俺にどんな力があるって言う？さっき言った事はそんなに恐ろしいものだったのか？」
リリーは頷き、

「ええ、あなたの『盟主級』の能力は、」

「他の能力の干渉を受けた時、その能力の一部及び全てを行使できる能力です。だからあなたは美悠さんの武装を扱えた。」

加えて、

「そして優衣さん、舞衣さん。あなた方は感じていた筈です。政幸さん本人への干渉すら、困難になって行ったのを。御門さんも、『戦機級』であった筈の彼が魔術を用いた所を見ていて、それを不思議に思ったでしょう？」

そこを、クロウが、

「つまり政幸さんは、盟主たる存在でもあるのです。けど、その能力も、同じ『盟主級』にはごく一部しか使えないのです。」

「リリーは『盟主級』の持ち主。現に『革新派』の次期盟主です。その能力は、『時、空間を操る能力』です。加えて、『一度のみ、死を回避できる能力』です。」

リリーが返す。

「そして兄、クロウの能力は『騎士級』です。その中でも、槍を扱う高機動型です。召喚する鎧の防御は心許ないですが、槍のリーチ、身軽さから来る速度で、引けの無い強さがあります。」

一通り説明が済んだ。

が、

誰も、飲み込めない。

当たり前だった。

だから、リーリエは続け様にいう。

「ここまでは本題と言っても、余興です。ここからが、真の本題です。」

一息。

「私も、あなたに恋焦がれています。あなたは、新たな勢力を率いますか？率いるなら、ついて行きます。率いないなら、残念ですが、過去の幼いあなたを始末し、未来である現在を変えます。一方的ですが、こうする外無いのです。世界を救う為には。」

政幸達は、最早置いてけぼりと言えれば呑気なものだった。

しかし、美悠は違った。

持ち前の要領の悪さが功を奏したのか、

「えっと、つまりマサ君が新しい勢力を作れば、盟主になれて、マサ君について行く！って考える人はマサ君の仲間だよね・・・。」

「じゃあ、決まりだね。勢力創っちゃおうよ！マサ君が盟主で、私と、優衣さんと、舞衣さんと、リリィちゃんが、マサ君のお嫁さんで、御門君が盟友・・・？って、マサ君はあげないよ！私の！私のだからね！？」

相変わらずのテンションで騒ぎ、跳ねる。

神山姉妹も、そのおかげか吹っ切れる。

「仕方ないな。政幸よ。勢力、創れ。美悠の言うようにな。あと、嫁は私だ。」

「そうだ。そうするのが一番だ。政幸よ。あと、姉上には悪いが、嫁は私だ。」

御門も続く。

「そうだね。なんだか政幸がモテモテなのは驚きだけど、政幸の花の樂園を守る為なら力を貸そう。だから、勢力、創ろうか、政幸。」

政幸も、

「嫁とかそんなのは知らんが、こんな俺でもやっちゃっていいのか？ 美悠のおかげか美悠のせいかな、難しく考えるのが馬鹿らしくなっちゃった。」

要するに。

「既存の勢力なんか尻尾振んなって事だろ？ 上等だ。それに、世界を救うんだろ？ じゃあ、いい考えが浮かんだ。安直だけだな。それはな、いいか？」

「『創世派』だ。世界を救うんじゃない。世界を壊すんじゃない。世界を変えるんじゃない。世界を創り直すんだよ。コロニーだって全部墜ちちまったし、もう世界壊れてんじゃない。だったら、復興させようぜ。ってな。」

リーリエは、逆に驚かされる。

まさか、こんな短時間で決断を下すとも、自分の考えを固めるとも思っていなかったからだ。

これが新たな盟友の、盟友たる素質なのだろう。

自分の寄りどころが、この人になる。そんな未来に、リーリエは笑み、誰となく言う。

「よかった。」
と。

政幸は、リーリエの力を借りて空間を超越し、全国に声明を発する。

「俺は、朝霧政幸だ。三大勢力の思想は、俺の思想と合わない。俺は今、自分に盟主である素質があると知らされた。」

だから。

「新たな勢力、「創世派」を新造する。世界を、創り直す。それだけだ。」

「終末戦線」は、過去に数度行われた。全て、終末を迎えずに済んだが、世界は破壊されていく一方であった。

それ故、コロニーが出来た。

終末は、そのまま時が来たら世界が終わる。そのようなものではない。

終末を呼ぶ原因が現れ、それが世界を狂わせ、終わらせるのだった。

今度の終末も、何が起こるかは解らない。

だが、一つ前の戦後、「魔術級」の能力者であった無名の占術使いが残した、ある言葉が伝えられていた。

「眠りし者、再誕する。目覚めし者、再誕する。終末は、第三者の手に。」

【#5】世界は、何を求むのか（後書き）

そろそろ戦闘も交えて行くつもりです。

まだ、本題の手前の段階です。

しばしお待ちを。

【#6】変革（前書き）

第6話！

今回は戦闘シーンを頑張ってみました。

【#6】変革

世界は動いた。

あの声明の後、探知能力を持つ者などのお陰（所為）で、勢力への荷担者や、敵が来る。

今は、交戦中だった。

敵は「戦機級」。

・
・
・

「おらおらア！行くぜエ！」

相手の戦機は一人で二機を操るという、かなりランクの高い能力だ。一機は装甲が薄めで、ブースタの出力を高めた高機動のヒット&アウェイ型。

もう一機は重装で、多角的にミサイルを放ちながら、程度の低い攻撃は左腕の大盾に阻まれる。

こちらは重すぎず、軽すぎずの構成で、四脚型だ。「盟主級」の能力のお陰で形態の変化も可能な上、背部には大型の弩砲を、右腕には劣化ウラン弾を装填したマシンガン、左腕には中型のレールキャノンを載せている。

全て美悠が召喚した物だ。

「ヒャッハア！どうしたア！そんな貧弱な攻撃はこのH・シュヴァルツの盾にゃ通用しないぜエ！？」

重装機は、怯みもせず突っ込んで来る。

四脚得意の高速旋回から来る立ち回りから、軽装機の視界に重装機の盾を入れないようにする。

盾が劣化ウラン弾による熱で溶解し、段々とその身を薄くしているからだ。それを悟らせない為に、

《ファシユウ!》

風を切る弩砲の快音が響く。

軽装機はひらりと身を交わし、避ける。

「けっ! そんな大掛かりな武装も、L・ヴァイスにや当たんねエよ!」

だが、狙いは間違っただけではなかった。

突出していたブースタの基部の一部であるが、それを穿ち、破損させる。

「なッ! てめエ! やりやがったな! 畜生、制御が利き辛エな…。」

「当たり前だ。ブースタの片方だけを壊したからな。そんなじゃあ、今まで通りの飛行は難しいだろう?」

言いつつ、右後ろ脚を下げ、支点にし、マシンガンでヴァイスに、

レールキャノンでシュヴァルツに向ける。

「この一手を決める――!!」

マシンガンの乱射は、ヴァイスの右肘と左脚の付け根、その他の装甲面を溶かし、その機動を大きく制限する。

瞬間、足が止まる。

レールキャノンの一撃は、シュヴァルツの大盾を貫き通し、本体の頭を撥ねる。

機能停止だ。

「くッ、ぐアッ! てめエ・・・てめエええ!」

ヴァイスは胴体の後ろ半分をパージし、新たなブースタを戦場に晒す。

「へッ! こっちゃんあな、てめエよりゃ場数踏んでんだ。ブースター

つ壊した位で図に乗んなよ・・・！」

それに、

「シュヴァルツはもう動かねエ。頭部がねエからな。だが、ヴァイスだけになった分、制御は楽だ。」

だから。

「一気に行くぜエ！朝霧とやらア！」

ヴァイスは表面装甲を外す。内部も、一部が融解してはいたものの、関節を含めその程度は軽くなり、機動力を取り戻す。右腕のブレードを振りかざし、

シュヴァルツを両断した。

「な、何だと！？血迷ったのか？」

即座にヴァイスはまた距離を取る、

「てめエは甘チャンなんだよ。H・シュヴァルツはな、その死体を敵の盾にするような愚か者じゃアねエ。」

「散りな。」

《バゴアアン！》

半ばシュヴァルツを盾に動いていた政幸は、不意を突かれた。

シュヴァルツがその身を爆散させたのだ。

「H・シュヴァルツはな、内部に高濃度の爆薬を忍ばしてある。機体の損傷率が一定を超えると、即座にはいかねエが爆発する仕組みさ。どうだア？効いたろう。」

敵は、ニヤリと笑みを浮かべ、言う。

政幸の機体は、その装甲の全体を致命的では無いものの、大きく損傷している。

「そりゃあ意外だったな。まさかあのデカブツがただ鈍重的じゃないとはな・・・。」

政幸はブースタを傷めない程度に暴発させ、跳ぶ。

空中で、機体の構造を変える。

損傷こそ減らないが、全体的に鋭角的な二脚のフォルムになる。装甲を減らし、残り少ない装甲の密度を上げ、防御力を確保する。

武装も、新造する。

背部には高速の垂直ミサイルと低速の左右で挟み込む機動で放つミサイルの射出機を、右腕には二連装のライフル、左腕にはエネルギーを循環、凝固させたバックラーを装備。魔術による物だ。

その、急速に変貌した相手に驚く敵、名をホワイト・B・ロイ。

ロイは信じられなかった。

「おい、てめェ・・・。なぜ変形した・・・！？それもてめェの能力の一つなのか！？」

政幸には、わかりきった事だ。だから、

「その通りだ。凄いだろう？驚くのは無理も無い。戦機を変形できるのは、俺だけだからな。今まで名の売れてなかった、俺だけな。」

力が、交差する。

ライフルを4連射、系八発を叩き斬るロイ。

その剣に受けた反動の流れを殺さずにヴァイスは回し斬りを繰り返す。

バックラーは、その刀身が主を傷つける。それを許さない。

魔力の滞留が剣を絡め取る。

計算通りだ。

「なッ！？そんな事まで出来んのか！？」

また、呆氣に取られるロイ。

まずは、左腕から。

左肩の付け根にライフルをあてがい、撃つ。

ヴァイスは軽装であり、尚、関節を撃たれたのだ。

左肩から崩れ落ちる。

次は右腕を取る。

幸い、未だバックラーの魔力に絡められたままでよかった。

対魔力の術を織り込まれたりした剣であったならこうは行かなかっただろう。

同じく関節に、ライフルをあてがう。

「これで終わりだな。だが、ここで往生する訳には行かないんだ。」

「てめエ……。くッ。残念だなア。早々に死ぬなんてよ。俺ア、まだ死にたかねェんだよ……。畜生……。」

右腕を動かす。

ライフルを、関節に「差し込む」。

《ダァン！》

無情な銃声が、残響と共に、政幸はもとい、一同に届く。

無腕の身となったヴァイスは、その身を崩し、分解された。

中から、ロイが見えてくる。

ロイは生きている。

「殺さねエのか。いいぜ、殺せ。俺だって世界を救いてエ。だがよ。てめエのが強かったって、それだけだ。強えエモンだけが生き残る、「終末戦線」はもう始まってんだ。てめエの声明でな。」

「だから、殺せ。」

ロイは目を閉じる。

覚悟は出来ていた。

「残念だが、それは出来ない。あんたも、世界を救いたかったんだろ？ だったらさ、仲間になれ。とは言わない。けどさ、手助けくらいは、してくんねえかな？」

ロイは思い、言う。

「いいのか？ 俺の救いはてめエらの救いと訳が違エかもしれないねえからよ。また戦う事になるかもしれないねえぜ？」

政幸は、

「ああ、それでも構わない。その時は、またあんたを倒して、俺達の救いを達成させるだけさ。」

「・・・そうか。そりゃア楽しみだ。負けたから死ぬ。なんてのも馬鹿らしくなっちゃった。これも救いなんかなア・・・。」

だが、

「次戦う時はよ、情けは無しだ。てめエも俺も、殺す気で戦う。いいな。」

「そうしよう。どうせその時はもう、戦線も終盤だろうしな。誰が世界を救うか、賭けようじゃないか。」

皆、微笑んでいる。

ここでもし、政幸がロイを殺していたら、こうはなっていなかっただろう。

だから。

悲劇は起こる。

いつの時代にも。

地面が隆起する。

それは4メートル近くの大きさを持つ手の様に形を得ては、

《ミシツ・・・グシャアツ。》

握り潰す。

誰を？

ロイを。

「え、あ・・・イヤアアアアッ！！」

美悠の叫びがこだました。

ロイはその身を大きく変える。

全身をくまなく碎かれ、潰され、関節も 何も区別のつかない血を
撒き散らかすだけの肉塊に。

土の手は、ロイを握り潰し、ただの肉塊にすると拳を作り、

打ちつける。

肉は散り、皆に、周りに、木々に、植物に。

辺りを黒く染める。

『裏切り者ニハ死ヲ・・・。欠片モ残サズ、消シテクレル・・・。』
感情の無い声がどこからか響く。

ロイの頭は、神山姉妹の足下へ転がる。
目は、死んでいた。

もとより諦めていたのだ。

再戦など叶わない、夢物語だと。

結局は、ここで死ぬと。

ロイの頭は、何も言わない。

先程のように、少し掠れた、男らしい声は聞こえてこない。

小さな土の手が現れ、《ベチャアツ・・・》ロイの頭を闇に葬る。

「な、や、やめ・・・ろ・・・。」

「ど、どう・・・いう事なのだ・・・？」

御門も

「どうしてなんだよ、どうして、あの人は死ななきゃならないんだ
よ！」

ロイの血肉全てが土に溶け出し、馴染み始めた頃には、

「ホワイト・B・ロイ」

と書かれたチョーカーだけが残された。

無情にも、人は死にゆく。

理由は沢山ある。

殺し、殺され。

人に限らず、生物は死ぬのだ。

そして、政幸達はまた戦いを繰り返して行く。

ロイと末路を同じくした者はまだ出て居ない。

「裏切り者」とは何か。

世界は、何を隠しているのか。

否、

世界に、何が隠れているのか。

世界は絶えず縛られている。

何者かの手で。

【#6】変革（後書き）

内容は、どうだったでしょうか。

ここがいけない！

こうしたらいい！

というような意見が御座いましたら、どうかコメントなり、どこかで頂けると幸いです。

【#7】インセクト・ケージ（前書き）

縛鎖一バクサーの7話です。

いやあ、前回は1話一戦だったので、今回は特殊ですが、2話構成です。

【#7】インセクト・ケージ

ロイの死から数ヶ月が経つ。

時が経つのは早いもので、皆はロイの弔いも早々に、戦いに暮れていた。

いや、戦わざるを得ないだけだった。

この数ヶ月の中でわかった事もあった。

- ・各大陸の季節の様相は、変化しない。
- ・大陸ごとに地形も違う。
- ・人類と酷似した生物の生息跡があったが、原因不明の絶滅。

という点だ。

春の大陸は「スプリング・ヒル」

夏の大陸は「サマー・フォレスト」

秋の大陸は「オータム・バレー」

冬の大陸は「ウィンター・フィールド」

と呼称が付いた。

名の通りの地形を持っている。

だが、スプリング・ヒルには別名もあった。

「天使の死地」と。

原因は言わずもがな、「創世派」が戦闘を繰り返し、ある者は仲間に、ある者は死す。

三大勢力にとって脅威の他無かった。

「革新派」にとっては怒りの矛先でもある。

リーリエ、クロウの裏切りの場でも有ったからだ。

そしてまた、
チョーカーを付けた資格が来たのだ。

音も無く舞い降りた男は、語りかける。

「ご機嫌よう。「創世派」の皆さん。」

皆が不意の声に身構え、振り向く。

「おやおや、怖い怖い。早速ながら、自己紹介を。私はアルフレッド・ベイリー。あなた方の、敵です。」

飄々とした男は、能力を発現する。深蒼の光が発せられる。
「私の能力は「魔術級」です。攻撃系の魔術は勿論ですが。私の本分は、」

深蒼の光が、周囲に広がる。

「蟲の召喚です。」

光が爆ぜると共に、六つの脚をもつ蟲が召喚される。

「青の光……。俺には相性が悪い。すまんが、誰か頼むぞ……。」

「政幸は言う。」

政幸は真紅の光を発する能力者。

赤の光は青の光をもつ能力者に弱いのだ。

「私、行くよ。」

美悠が出る。

美悠の光は明るい黄色。黄色の光は、青の光に強い。

その上、明色は暗色に強い。

能力の強度で劣ってはいても、相性で覆せなくは無いだ。

美悠は、全身の各所にプロテクターを、手元には二丁の長銃を召喚する。

「じゃ、行ってくる。」

蟲は、青黒い津波のように押し寄せる。

美悠は、右の長銃にピアース弾を召喚する。

「まずは、一発！」

《ガイン！》

高初速で撃ち出された弾丸は、音速を超えていた。風を切り、フ。ともブ。とも言わぬ間に命中する。

《ギ、ブシュウア！》

甲殻を貫き通し、後続の蟲を幾匹も刺し通す。

『ギイイイアアッ！』

沢山の悲鳴が木霊する。

「この魔力じゃこの程度かー。じゃあ、もっと込めちゃおっか！」
右の長銃に魔力を沢山詰め込んだ炸裂弾を、左の長銃に逆噴射のギミックを込めた弾丸を、それぞれセットする。

「これだけやっちゃうと、流石にちよつと辛いね……。でも、まだまだ行くよ！」

右を撃つ。

初速は流石に遅い。

亜音速にも満たない。

ほぼ同時に、左も撃つ。

放たれた弾丸はギミックを解き、ブースタ状の物を展開し、美悠に噴射する。

美悠は後方に大きく跳躍し、

蟲達には全体に大きな爆発を生む。

黄色の閃光と共に、蟲の大半が燃え尽きた。

「・・・ほう、やりますねえ。相性もありながら、爆発圏内の蟲を全て消すとは・・・。それでも、私の魔力の半分を注ぎ込んだ蟲達でしたかね・・・？」

美悠も、少し誇らしげに、

「私だって伊達に、マサ君のお嫁さんじゃないもんね！」

男は卑しい笑みから、憤怒の形相を露呈する。

「流石に、可愛らしいお嬢さんであっても、私の可愛い可愛い蟲達を消し炭にして頂いた恩を仇で返さざるを得ないですよ・・・！」

深蒼の光が、一層濃く広がる。

魔力の半分を消費した。と言うのは嘘ではない。ベイリーは随分疲弊している。

だが、怒りの力に任せてか彼のキャパシティを超える量としてもおかしくない、魔力が溢れ出す。

深蒼は、光と言うより、濃霧だ。

巨大な人型をした蟲が立ち上がる。

すかさず美悠は《ガガガッ！》長銃を連写する。

正確な射撃だ。

関節という関節を砕き、貫き、潰していく。

蟲は、依って立つ為の力を抜かれ、倒れ伏すが、

「わざと巨大な蟲を召喚したと言うのに引っかかってくれて・・・。沢山の強装弾を有難う御座います・・・。」

不敵な笑みだ。

「何が、言いたいの、か・・・な！！！」

先程より爆発の規模を縮めて濃縮した炸裂弾を二発撃つ。

《シュビュウ！》

「嘘でしょ!?!? あり得るの・・・!?!?」

嘘ではない。「深緑色の光」が防盾を形成していた。

見れば、巨大蟲の銃創も、深緑色だった。

「ええ、事実です。私の能力は、深蒼の光です。が、微力ながら深緑色の素質もあり、生み出せるのですよ。」

黄の光は、緑の光に弱いのだ。

防盾は、蟲に喰われる。

蟲は、防盾の魔力と美悠の弾丸から「取り込んだ」魔力を吸収し、分離した。

数は2、大きさは始めの大群と変わらぬ3メートル程だ。

「こちらも、密度を上げて参ります。そのお陰で緑の光を練り込めないのが不満ですが。」

二匹の蟲は、美悠に飛びかかる。

美悠は、先程の炸裂弾を二匹に撃ち込む。

《ダン、バガアァン!》

しかし、蟲は甲殻の表面に焦げを作るだけで、平然としている。

一匹は当たりが悪く、仰け反るように弾かれ、地を打つ。

一匹は、怯む事なく、

《ドシュ・・・!》

「あゝっ!・・・い、いやあっ!」

美悠の右腕を噛み切らんばかりに食らいつく。

能力の属性上の相性により、プロテクターが何とか威力を低減する。が、蟲の歯は止まらず、深く肉を断つ。

筋肉は斬られていない。だが、銃を撃つ程に耐久力は残しては貰え

なかった。

「うっ……。厄介だなあ、片腕だけなんてえ……。」

涙目ながらも、その態度は揺るがない。そんな美悠に、ベイリーは嫌気を示す。

「切り損ねましたか。……まったく、腹立たしい……。」

そう言うと、ベイリーは緑色の淡い炎を作る。

「燃え上がれ。」

淡い緑炎は体積を増し、散り散りに、人の拳程の大きさになる。

美悠を中心に、半径5メートル近く網状の緑炎で構成された檻が出来る。

「掛かれ、牢炎。」

言った瞬間、炎が美悠に向かって収束し、爆発するように燃え上がった。

神山姉妹がたまらず言い漏らす。

「おい、大丈夫なのか……。あれ……。」

「わからんが、美悠の事だ。きっと大丈夫だ姉上。」

聞き、訂正するはリーリエだ。

「違います、舞衣さん。優衣さんが気にかけているのは、ベイリーという方の事です。彼の魔力はあれほど消費されて、何故また魔術を行使できるのか、です。……美悠さんは、大丈夫な筈です。」

二人の言う通り、美悠は意識を持っていて、しっかりと立っている。プロテクターを追加で展開、一時的な強化をしたのだ。

だが、相性の加減で防ぎ切れずに服は部分によってただれ、微かだが、火傷もしている。

「もう許さないんだから……。！女の子の肌は傷つきやすくて、痕も残るんだからー！！」

一同は思う。

そこですか。うん、否定はしないけど……。

美悠は左の長銃を棄て、新たに新造する。

設置型の機銃だ。

ガードはない。が、ベイリーを囲むように展開されている。

壁を反射する弾丸を装填し、

「もうやだ……。死んじゃえー！！」掃射する。

弾丸は、ベイリーに飛ぶもの、そうでないものとあったが、壁に反射し、その殆どがベイリーに向かう。

が、やはり一筋縄には行かない。

深緑色のバリアが展開され、弾丸に込められた魔力を吸収する。

それが誤りだった。

「ベイリーさんも単純だねえ……。女の人にもすぐ騙されちゃうよ？」

美悠は「狙撃級」でも異例の多様性を持った攻撃が可能なのに加えて、レンジャーの力もあった。

故に、

「この弾丸はね、障害物の反射の能力もだけど、他の人が自分魔力に変換する。なんて時に……。なんて言ったらいいんだろ……。

まあいいや。その人の魔力に対して毒になる特性を仕込んだんだよ。

「ベイリーは感じる。」

己の体内で暴発し、「元よりベイリーの物でもあった魔力」でさえもベイリーを破壊し始めている事に。

そして。

「ああああああ！畜生！畜生！！畜生ちくしょうチクショウチクショウチクショウチクショウ！！このアマ！ちよっと上手く行ったからと言いい、調子付きやがって！！もういい。この身体も直に崩壊する。だから！！」

ベイリーの身体は無尽の隆起を繰り返している。

「ありやりや、やりすぎちゃった……。即席な癖に効き過ぎだよ
……。」

美悠は呑気に言う。

魔力の正常な行使はもう出来ない筈だ。それを知っての態度だ。
だから。

不意の「暴走の利用」への対処を怠った。

ベイリーが最後に、誰にともなく、嘯く。

「私が最後、何もせずに死ぬと思ったか……。ククク、ふっふっ
ふっ……。フウツハアツハアツ!! もう何もかも、消えるんだよ・
・。死に絶えるんだよお!」

甲高く高笑いを繰り返した末、事は始まった。
ベイリーの死を皮切りに。

ベイリーの最後と、ベイリーの終わりとを引き換えに、始まった。

巨大蟲が大量に溢れ出した。

数は、1万を軽く越さんばかりの数だ。

「えっ、えええええ! ? あ、あわわわ……。マサ君、マサ君! ど
うしょおー!!」

大変困った様子で美悠が慌てる。

（涙目だし……。あれ、ちょっと可愛くね? でも、今の状況やバ
クね?）

……。政幸、脳内審議中……

取りあえず、煩惱を置いておくと決める政幸。そして、

「よし、倒すか。御門、手伝え。美悠とクロウも手伝ってくれ。優衣、舞衣、リリィは、可能な限りのバックアップを頼む。他のみんなも、出来る限り頼むわ。」

言い、真紅の装甲が現れ、深蒼の蟲の群へと突入をする。

包囲する巨大蟲。

数は1000を下らない。

味方は100にも満たない。

絶望的な状況下、蟲の檻による包囲戦が始まる。

美悠は忘れずにベイリーのチョーカーを持っていた。何か鍵になると信じて。

絶望の「インセクト・ケージ」に、小さな希望が抗いに行く。

【#7】インセクト・ケージ（後書き）

多分、次回は若干間があるかもです。

何か、ご意見がありましたら遠慮なくどうぞ。

【#8】ブローケン・デステイニー（前書き）

8話ですー。

ゆっくり更新！

【#8】ブローケン・デステイニー

真紅の装甲は、両手に一本ずつの長刀を携えていた。

造りは荒くも刃は研ぎ澄まされ、重量をもって叩き斬る事はおろか、敵を刺し通す、鋭利さをもって斬り抜く、刀の様に斬り裂くなど、多彩な可能性を秘めた剣だ。

美楡も、黄金に煌めく機銃を掃射して当たった。

弾丸を多種に渡って使い分け、味方の援護と、爆撃による掃討も行う。

御門は、持ち前の運動能力を、能力の加速を得て駆使し立ち回る。

蟲の脚が幾重にも飛び交い、歯を噛みつけて来るのを回避し、節を刻み、口腔に炎をぶち込むなど、繊細でありながらどこか荒々しさを残す、芸術的な戦いだ。

光は、純緑色。

原色の光だ。

原色の光は、明色に強く、暗色に弱い。三竦みになっているのだが、明度の不利を思わせない、見事な戦闘を繰り広げる。

クロウも、長槍を巧みに操り、点による局地的な破壊で蟲達に致命傷を与えて行く。

クロウは、暗黄色の光を散らしながら蟲達を碎き、裂き貫く。

優衣、舞衣、リーリエの三人は、政幸とクロウに近距離の防御を頼み、神山姉妹は決して強くは無いものの、蟲達の弱点を上手く突き、殺して行く。

リーリエは、蟲達の時間を遅らせて侵攻を鈍らせ、時には近づきすぎた蟲を異相空間を用い、遠くへ引き離す。

蟲達は、津波のように押しかけながら、「創世派」の人々を滅ぼさんとする。

蟲達は同じ生物として構成されながら、人造で、尚且つ個体差もあり、ましてや統率も取れていない。

その為、共食いを始める愚かな蟲もいた。いや、共食いをする蟲を愚かと称するには、些か早計であった。

蟲達は魔力で構成されている。

いわば、魔力の塊だ。

その魔力の塊が、魔力の塊を「食らう」のだ。魔力自体も同質の物。そうなれば。

《ブチッ、ブチ、グシュッ、ギギギ・・・》

蟲を食らった者は、ある者は強化、ある者は進化を遂げる。

「数が多いね・・・。キリがないよ!」

美悠はたまらず叫ぶ。

「戦闘は得意ではないのだが、な!」

「姉上、愚痴をいっても!仕方ないぞ!」

神山姉妹も手は止まらないが、叫ぶ。

蟲達の残数、およそ5000。

「創世派」の残数、およそ40。政幸達も含めての数だ。

真紅の戦機は、中を舞いながら着々と蟲を裂いては潰していく。

相性が良ければ。と政幸は思うが、この際は仕方がない。

政幸はある策を思いつく。現状を打破する為の。「リリィ!俺の時間を早めてくれ!出し惜しみは無しだ!」

リリィは頷く。

「了解しました。ですが政幸さんは、一体何を?」

「まあ、見てなって!」

政幸は即座に機体の構造を変化させる。

真紅は形を変え、四つ脚の碎断者から、背部の左右に10門ずつ、両腕に5門ずつの、計30門のミサイルカタパルトを装備した大型の機体になった。その大きさは、高さだけで15メートルを超えていた。

真紅の巨軀は、カタパルトを展開する。

「お前ら、下がってろ！リリィ！」

リリィは意図を察し、皆を異相空間を用いて後退させる。

真紅の巨軀はその迫力を幾分か増し、長大なカタパルトを鈍く光らせる。

「よっしゃ、いくぜえ！」

《ド、シュバウ！》

と例えたか、そんな腹を打つような音が連鎖、リリィの加速によって、その間隔は極限まで短縮されている。

《ドウツ！ドガッ！》

《ギ、ギギィ！》

爆破音と蟲の悲鳴が交差する。

何発撃っただろうか。

何重奏の制裁だっただろうか。

一帯の蟲は焼け落ち、見る影もない。

だが、不意は付き物だ。

5メートル弱の強化された蟲が数十と、

爆砕された蟲達の魔力が収束、結合して、10メートルを越さん蟲が10匹余り現れる。「へえ、今度のはすげえじゃねえか！」

政幸は1人、何故か喜んでいる。

皆も、文句を垂れる。

「ねえ、喜ぶのはいいけどさあ・・・マサ君？あれ、絶対強いよ？」

「馬鹿だな。」

「うむ、馬鹿だな。」

リーリエも、

「まさかこんなことになるとは・・・想定外です。」

「全く、政幸さんの爆破でああなったとしか考えられませんね。」

クロウも続いた。

最後に御門も、

「政幸い、もうちょっとでいいからさ、考えようぜ？」

政幸は全くだ。といったげに、

「何故俺だけ・・・大体！数は減ったんだ！いいだろ！？さ、やるぞ！」

政幸の叫びを皮切りに、「創世派」の皆が動いた。

強化蟲の外殻の高度には特に変化がなく、筋力と、「魔術の行使」に主な変化が寄った。

「魔術を使ったと！？」

「防盾を展開してくれ！」

各方面から声が響く。

想定外ではあったものの「創世派」の面々に欠損はなく、確実に蟲達を討伐していく。

巨大蟲は、強化蟲より堅牢で、力強い。

幸いにも魔術の行使はない。

政幸は戦機の中で、肩で息をしていた。

「さっきので大分魔力使ったな・・・うまくやれんかったら、悪いな。」

言いつつ、高機動用にブースタを増設し、余分な武装や装甲などをパージしていく。

真紅は、ロイを倒した二脚へと変わる。

剣斧は軽量化された一本だけだが、構造は刀に似せ、速度で引き裂きに行く。

故に、真紅の瘦躯は巨大蟲の甲殻を狙わず、脚の関節や胴体の節などを裂きに行く。

「うおおおああ！」

《ザシュツ、バシャ！バシャア！》

空中で身を回し、動きの中で刃を当てることで、刀の腹から切っ先にかけて巨大蟲の頭を落とした。

巨大蟲は霧散し、消える。

美悠も負けてはいない。

右腕を気にしつつも巨大狙撃砲塔を召還、設置し、巨大蟲の脚の関節を落として行く。

巨大蟲はバランスを崩し、その場に倒れ伏す。

後は、頭から体にかけてピース弾を撃ち込み、巨大蟲を霧散させる。

御門は、得意の魔術の炎を剣に宿し、巨大蟲の甲殻を溶かし、そこに刃を斬り入れる。

熱を持った刃は戸惑う事無く巨大蟲の甲殻を斬り抜く。

巨大蟲は抵抗するが、巧みな剣捌きによって阻まれ、時に脚が切り落とされる。

そして、刃を眼前に掲げ、

「鮮やかなる我が灯火よ、業火を以て焼き払え！」

瞬間、魔法陣が形成され、巨大蟲の頭は消え失せた。

クロウは一人、変わった立ち振る舞いだった。

巨大蟲から距離を起き、遠方から槍を投じている。

しかし、その軌跡はやがて正確に蟲の節や甲殻を穿つ。

クロウの慣れた手つきで巨大蟲の頭は粉碎され、苦労もなく蟲は霧散する。

優衣達3人も、魔術による防盾や攻撃を生かし、巨大蟲を近づけない。リーリエが提案する。

「いい方法があります。」リーリエは続ける。

「そのまま、少して良いので防盾の展開をお願いします。」

二人は、もちろん疑問に思う。防御は抜かりない。

「方法、とは？」

「何をする気だ？」

リーリエは問いに答えを示す。

「充分です。準備は整いました。」

瞬間、周辺の巨大蟲の頭だけが吹き飛ばされた。否、消滅した。

「こういう事です。あの蟲達は頭を消し去ればそのまま胴体も霧散します。その為、単に消し去るのでなく異相空間への転送の連続による偏差で頭部を消滅させました。」

一息。

「切断だけでも倒せますが、他の人達の所ではなかなかの頻度で消滅せず、頭部が再生へ向かったので。私の魔力も底をつく程でしたので、思い切って。」

巨大蟲は、全てが消える。

体から吹き出したどす黒く、青みを帯びた体液も、切り落とされた脚もだ。

だが、傷は癒えず、死者も戻らない。

当たり前の事ではあったが、その所為で蟲の軍勢を退けた喜びのムードではなく、どこか虚脱感があった。

望まれぬ世界は存在しない。

どのような世界も、存在すれば一度は望まれる。

人により、その世界を是か非かを決める価値観が違う。

正か否か。

いずれ、世界の総意、結末は訪れる。

それが天国か。

それが地獄か。

【#8】ブローケン・デステイニー（後書き）

次回は気分転換回にしようかな…。

【#9】神聖なる過去の憎悪（前書き）

縛鎖一バクサーの9話です。

読んでくださっている方々に、感謝です。

【#9】神聖なる過去の憎悪

戦いは集結した。

巨大蟲は「創世派」の肉を裂き、骨を断ち、その組織を穿ちながらしかしその数を0にした。美悠の右腕は、癒えていない。

政幸は、問う。

「美悠、その右腕・・・大丈夫なのか？」

美悠は苦笑いを示し、

「ちよっとまづいかなあ・・・。さっきの人の魔力が傷口に残ってて、治らなくて・・・。」

美悠は続ける。

「治癒促進の魔術はかけたけど駄目みたい。むしろ魔力を込めるだけ酷くなるよ・・・。あはは、駄目だね・・・。」

何とか笑ってみせるが血は少しずつ流れ出ており、美悠自身、座り込んでいる。

他の者も膝を付いたり、倒れ込んでいたりする。あれだけの魔力を行使したリーリエは気を失っているが、無理もない。

皆、魔力の消耗、物理的な体力の消耗を経て緊張から解放されたのだ。

「今動けて、どうにか出来るやつはいないか!？」

政幸は叫ぶ。

と、そこに。

「ま、政幸、さん。遅ればせな、ながら、只今、参りました!」
一人の少女が姿を現した。

「誰だ!？」

政幸は半歩下がり、真紅の光を瞬かせる。「わっ!ち、ちよっと待ってください!て、敵じゃないです!本当ですからあ!」

少女は慌てて制止する。

政幸も、

「最近はお敵ばかりだからなあ、いくら可愛い女の子でも唐突には・・・って、ちょ!？」

ふにん。と、柔らかな感触が政幸の手には感じられた。

美悠は口を阿呆のように開いたまま。

神山姉妹は眉をたてて。

幸い、リーリエはまだ起きてはいない。

御門とクロウは揃って頭を抱えていた。

政幸の能力光に引けを取らない程、顔を真っ赤にした少女は、

「こ、これで、敵じ、じゃないと、わかって、くれ、ました、か・・・?」

自らの胸に政幸の手を押し付けていた。

少女の態度を見るに、誰も演技とは思わなかった。

政幸も顔を赤くし、

「わ、わかった、わかったから、その、い、一旦、離せ・・・。」

少女も、流石に観念して政幸の手を離す。

「で、では、疑いも晴れたこと、ですし、じ、自己紹介、します・・・。」

俯きがちに、しかし落ち着きを取り戻しつつ、続ける。

「私の、名前は、リード・H・フランです。「保守派」のベルベモット聖堂の、第7コロニー「悠遠」にあった、ベルベモット聖堂総本部より来ました。」

政幸からは残念ながら、疑いがかかってしまっていた。

「えーっと、フラン・・・でいいよな? フランは、何故「保守派」の人間なのに戦闘以外、さらには仲間入りの目的でここへ?」 フランは、少し表情を曇らせて、

「それは・・・。」

「言ってしまったえば、自分の意志で離反し、「創世派」に入ろうと思っただけです。」

政幸には、複雑な事情があるのでは。と思え、

「そうか・・・。」

としか言えなかった。

そこにフランは、更に言葉を紡ぐ。

「私の能力は、「神聖級」です。「盟主級」に及ばないながらも、強力です。きつと、ですが・・・。「神聖級」には、教会や聖堂の関係者しかありません。基本的には神聖魔術を用いて、浄化による攻撃と回復を行います。」

「で、でも、私は違っていました。能力光が無色透明で、行使する魔術は、自ら色を付加できる。という特徴がありました。」
一同は驚きを隠せない。

「盟主級」でない能力で、そこまで超越した力があつたからだ。政幸は失礼に思いながらも、まだ何か聞きたいと思い、

「フランは他に、能力以外でも、何か言える事はあるか？」

フランは頷き、

「ありますけど、聞きますか？ただ、聞くには、覚悟をしていただかないといけません・・・。」

政幸は、覚悟なんてとうの昔に出来ている。と思い、純粹に聞いた。とも思った。

だから、

「大丈夫だ。どんな覚悟でもしてやる。」

フランは、申し訳なさそうに、

「では、話しますよ？私のいた聖堂では通常の教育の他に、公にならず隠匿された過去・現在の情報や、その他にも、やはり通常の教育では教わらない事も学びました。その事についてですが、」

「春の大陸には「創世派」、夏の大陸には「破壊派」、秋の大陸には「保守派」、冬の大陸には「革新派」・・・と、各勢力の人々が寄りを戻したり「創世派」には集い始めています。」

続けて、

「私やリーリエさん、クロウさんの名前がなぜ日本人の名ではない

のに、並びが日本人の名前の様なのか、です。それは、以前の戦線を鎮め、終末からも世界を救った「破壊派」の盟主が日本人で、その後世界を征服し、せめて名前を日本名の並びにしろ。そう言ったからだそうです。」皆、現在の世界の情勢を知らされ、隠匿された過去を教えられ、そして、

「そして、今度の終末は、「人ではないもの」が引き起こします。」現在、どこにも知れていない、

聖堂の総本部のある「保守派」でさえ知らない、

現在の「世界の裏側」の片鱗を、教えられた。更に、

「ごめんなさい。私が来た以上は「保守派」の聖堂勢力も、ここに襲撃に来ます。そして、」

政幸達は、覚悟も出来た、受け入れる事も容易な、戦闘の危険を知らされ、

フランは、再び顔を赤く染め上げ、

「聖職者に破廉恥な行為をした以上は、せ、責任を取ってもらいます・・・。」

各人、様々な意味で覚悟のし難い告白を為された。

「あ、あと美悠さん・・・でしたか、腕は治癒させておきました。

あの手の呪術を行使するレベルの能力者を倒すなんて、凄いですね・・・！」

笑顔を見せられた。リーリエは、起きていた。

だが、フランの告白「だけ」を全部聞き、しばしの硬直の後、いつものリーリエからは想像出来ない、物凄い覇気で政幸を睨みつけていた。

政幸はちらとリーリエを伺うが、そのジトつとした表情を見て、

（あれはあれで、可愛いな・・・。）
と、意外にも呑気だった。

もう、政幸は吹っ切れていたからに過ぎない。
だから、

「あー、もう。いいや。うん。嫁とか、そういうの、もう誰でも来い。というか、いくらでも来い。というか……。全部受け入れてやるよ。マジで。」

大胆にも程があった。

やはり馬鹿であった。

後に、女性陣のみならず、御門やクロウに詰め寄られたのは言うまでもない事であった。

「もう、マサ君はいつもそうだよ！優柔不断で、女の子にだらしないんだから！」

美悠が叫ぶ。

「政幸はなぜあんな事を言えたものか！……いつそこの私の御身の虜にしてやろうか……。」

優衣は何やら企む。

「姉上よ、言ってしまったては私共々手も足も出なくなるが、その胸では無理だと思うぞ。いつそ2人でしかけて、私が政幸の手解きを……。」

舞衣は舞衣で、危険な事を言う。

「ならばお二方より、背も胸もありますし、私が一番ですよ。政幸さん？」

珍しく、リーリエも張り合う。

「ち、ちょっと待ってよ！だったら私の方が凄いよ！絶対負けないもん！」

美悠は、ここぞとばかりに胸を誇張する。

「「幼なじみの時点で逆にアドバンテージを失ってると思っていたがな。」」

姉妹の圧倒的なコンビネーションの後、

「あら、珍しく意見が合いましたね。私達の方が新鮮味があります

からね。」

リーリエも仕返す。

「争うつもりは無いが、胸の事を言った恨みは覚えておけ。」

と、優衣

「姉上より、じ、若干は胸のある私を同程度に置いた恨みは覚えておけ。」

と、舞衣

「舞衣よ。それは事実とて言うものではないぞ？」

優衣が怒りを隠せずに、

「す、すまん、姉上……。調子に乗りすぎた……。ゆ、許してくれ。」

舞衣はたじろぐ。

「あ、あのう……。？私はどうしたら……。？」

フランも戸惑いながら参加。

「え、えと、話は聞きました但改めて、宜しくお願いします。フランさん。」

「あ、こちらこそ、リーリエさん。」

フランが右腕を頬ちあてがうが、それを見て、

（美悠さんには及びませんが……。い、意外と胸がありますね。フランさん……。）

表情を暗くし、胸を押さえながらリーリエは俯く。

その様子を見て、神山姉妹も同調して落ち込む。

一方、少しアウェイになった政幸は、

（フラン、意外に胸あったな……。柔らかかった……。っておい！そうじゃないそうじゃない。美悠の方があははずだ絶対……。っって違ふ！！！！）

1人芝居を悶々と心で行っていた。

「ていうか、もう夕方だね……。夜どうする？私はマサ君とイチヤイチヤする予定があるけど……。？」

美悠が少し体をくねらせて言う。

「それは私だ。」

舞衣はすかさず、

「舞衣よ、そこは当然、姉である私だ。」

優衣も譲らない。

「あ、あなた方がどのような言おうとも私は、初めてを政幸さん意外に易々と渡す訳には行きませんので……。」

リーリエも、いつもより積極的な事を言う。

「さ、先にアプローチをしたのは私だから、私には少し分があると思うなー。政幸さんは、どうするのかな……?」

フランも、負けじと突っ張る。

そこに、御門が、

「じゃあみんな、こうするのはどうだろう。」「どうせ同じ家に住むんだし、みんなで1日交代で政幸と同じ部屋で一夜を過ごすというのは。まずは露月さんから、優衣さん、舞衣さん、リーリエちゃん、フランちゃん……と、ローテーションを組むとか。あ、勿論同じベッドで寝ても良いけど、政幸が誰かを選ぶまで、そういう関係になるのは厳禁だ。」

加えてクロウも、

「大体、この数ヶ月間見てきて、政幸にそんな勇気があるとも思えない。その日の番じゃない子は安心していいと思う。リーリエも、心配しなくていいからな。そうだな、美悠君がその事を、今夜教えてやるといい。それまでは秘密だ。きっと驚くぞ……。」

若干顔が笑ってるのは気にしない方が良いというのは女性陣皆、理解していた。

無駄に争わず、代わり番こでもチャンスがあるのだから、この案はすんなりと飲み込まれたのであった。

時は無情にも過ぎる。

止まらなく、戻らない。

止める事や、戻す事は出来ても、大きく未来を変えるのは困難だろう。

終末が静かにその身を起こすように、愛も憎しみも、気づけば芽生えていたりする。

終末は起きていない。

だが、

終末は始まっていた・・・。

始まっているが、その姿・・・つまり大きな異変は起きてはいない。

世界が存在するならいつかは滅びる。

そのカウントダウンは世界の誕生と共に封切られる。

終末の「発現」はゆっくりと、近づいてきていた。

【#9】神聖なる過去の憎悪（後書き）

次回も、戦闘は無しにするつもりです。
では、また次回お会いしましょう。

【#10】穢れし現在の憎悪（前書き）

10話ーン。

【#10】穢れし現在の憎悪

（絶対におかしい……。何か隠しているな、これは。）

政幸は疑いの色を隠せない。

家に戻ったのはいいのだが皆、政幸を申し訳なさそうに……。ではあるが、避けている。

ちなみに、この家は僅か3日で造られたものだ。

能力者がまだ集っていない時期ではあったが「僅か」と称すには、十分に遅かった。

本当に大規模の、それこそ都市レベルではないかぎり、遅くとも1日で造られるのが理想だ。

その後、夕方から夜にかけて会議をし、党派の皆にも改めて挨拶をすませた。

「で、何故お前がここに？」

政幸は、自分の部屋のベッドの中に美悠がいることに対して、疑問をぶつける。

「そういや、言ってなかったねー。」

「実は、これからね。私たち女の子は、毎日交代制でマサ君と一夜をともにするんだよ。」

美悠は「あはは。」と笑いながら話す。

政幸は

「話が飛びすぎだ。まあ、構わんが……。迷惑だけはかけてくれるなよ。」

「そんなこと言ってえ、嬉しいくせにー。あつ、でも、その。」いきなりしどろもどろになる美悠を見て、政幸は「なんだよ。」と言う。

「そ、その、え、えっちなことはしちゃ、駄目だぞ！う、うん。じ、じゃあお、お休み！」

政幸からすれば、訳の解らない事をいつつ消灯し、そそくさと床につく美悠に、えも言えない不信感と安らぎを感じていた。

美悠は、アホの子な時が一番彼女らしいからだ。

政幸もひと息つき、寝よう。

そう思い、目を閉じた。

「・・・きて、・・・ださい。起きて下さい・・・。」

政幸は、聞き慣れぬ少女の声を聞く。

敵襲か。と思い、身構えつつ、己の甘さを呪った。

「誰だ！」

「ああ、そんなに警戒なさらないで下さい。もし、私が襲撃に来たならわざわざ言葉は交わしてませんか・・・。」

腰まである長い銀髪を満月になびかせ、中背の少女が言った。

「お、お前はまさか・・・いや、お前は、誰だ？」

政幸は、この少女に合うのは初めてだろう。だが、既知の仲である。と、本能が告げる。

わからない。

政幸が数瞬の思考を凝らした後、少女は口を開いた。

「私の名は、アリス・ミドガルド・・・。名前からわかるかもしれませんが、私は、縛られぬ者です。」

「そして、今宵は貴方に返すべき物があり、来ました。貴方の今の

力を認め、力を返却しに参りました。」

政幸は、理解が出来ない。

そして、アリスという少女は、掌に真紅・・・いや、深紅の煌めきを灯した黒い結晶を償還する。

「これが、貴方の力・・・。貴方に解放された力は、原色であった光が深色になり、そして「盟主級」の力で得た能力の内、最も大きな力を持つ能力の増幅です・・・。直ぐに解りますよ。」アリスは恭しく一例する。

政幸は、言う。

「お前は、何者だ。」「縛られぬ者・・・。いずれ理解に及ぶでしょう・・・。では、お休みなさいませ。」政幸は、突然感じた内からの力の奔流を感じ、しかしその大きさに、気を失うようにそのまま眠ってしまった。

政幸が気を失うとアリスは、さも当然のように美悠の額に両手を重ねてあてがう。

両手からは、どす黒く「明るさを持たない」光が、音もなく溢れ出していた。

それは何かを与えるようで、何かを奪うようで。与えたモノにロックを施し、容易に得る事が出来ぬようにしたアリスには、積年の恨みを晴らした悪人の如く笑みをたたえていた。

翌日、政幸は自らの能力の異変を悟った。

美悠も、自らの心に、失ったモノがあると悟った。

両者共に、それを隠している。

いつものように、朝食を済ませ、ミーティングを行って居るとき、もう数える程では無くなった、敵の襲撃の情報が通達された。

敵は3人。

各党派の幹部一の中でも最弱ではあるが一が手を組み、襲撃に来て

いた。

幹部と言うからには、相手の紹介も無しに名前は割れた。

一人は、瘦躯だが、全身に無駄のないしなやかな筋肉を持った「保守派」所属の男、「山根群穰」やまねぐんじょうだ。

彼は「魔術級」にありながら攻撃系、召喚系などの魔術の行使が出来ず、補助系の中でも肉体強化の魔術を用いて肉弾戦を得意とする「モンク」。能力光は名前の通り、群青色。

もう一人は、局所的な防御力に優れる鎧を身に纏った、体型に目立った特徴の無い「革新派」所属の女「枯野櫂」かれのけやき。

能力光は明緑。「騎士級」で、両手に短めのサーベルを携えたヒットアンドアウェイを軸に戦う。

最後は、大柄な筋骨隆々とした体躯に、また大きな金棒を担いだ「破壊派」所属の男「キングス・ヴェルデ」。

能力光は暗赤。「騎士級」ではあるが、鎧を召喚せず、己自身の身体、筋力と、金棒の硬度、重量をもって周囲一帯を破壊し尽くす、通称「壊し屋」だ。

彼らの要求はただ一つ、「朝霧政幸一人対三人で戦闘をすること」だ。

もちろんの事だが、アリスの来訪は「創世派」の一部人間しか知らない。

昨晚の内に何があったか、何がどうなったか。それをすべて知るのはアリスしかない。

なのに、なぜだろうか。

世界は、無情だ。

勿論、政幸は辛うじて昨晚の「自分の身」に対して起こったことは覚えてはいた。

しかし、それを疑問の回答に用いれるほど気は回せない。

あの時、あの場所で起こった事は自分とアリス以外、誰も知り得ない筈だからだ。

要求の旨を大陸中に響く大音量で流すと、たちまちヴェルデが金棒を振り回して、周りの木々をその衝撃波でなぎ倒す。

半径300メートル程が更地にされた頃だろうか。

一機の「真紅」の光を灯した四つ脚の戦機がゆっくりと、しかし高速で接近してくるのを櫟は確認した。

「来たようだね。数は1、要求通りだ。」

櫟の言葉に続き、群穰が間延びした声で、

「櫟さんは、解っているだろう。問題はお前さんだ。「壊し屋」さんよ。今回は党派に関係なく共同戦線だ。間違ってくれるなよ。」

「当たり前だ。まずは目の前の生意気なガキを潰す。貴様らを殺す機会なんぞ、どこにでも転がってらあ。」

言い終えた時と同着だろう。

真紅の戦機と三人の能力者が、互いに距離をおきながら、対面した。

まずは動いたのは、群穰だ。

群穰に可能な能力自体が特殊であるが、「『準』盟主級」と揶揄された能力にて、「契約条文に於いて血判を印した者に恩恵を与える事を可とする。」となっている。

つまり、血判を押せば通常不可能な「能力の干渉」が可なのだ。

これで盟主級でないのは能力では単に、強化術のみしか用い得ないからだった。

先に契約を済ませていた2人は、身体の各所に群青色を灯していた。櫂については、肩、肘、手首、膝、と瞬間的に力、速度を強化し、得意の連撃を鍛え、

ヴェルデは、胸部から指先までを、満遍なく強化し、ただ一発一発を重く、鋭い物としていた。

群穰本人に至っては、脚部を強化し、姿勢を低く保ち、攻撃を回避する構えだ。

強化が十分に行き渡った折に、2人は動く。

櫂が素早く跳躍し、彼我の距離を詰める。

サーベルを振るい、瞬間に7連撃を決める・・・が、政幸も負けじと、素早くシールドを開く。

高密度で編まれたエネルギーシールドは、しかし数寸のズレもない鋭利な剣戟に、中央から破られた。

再生されていくシールドを尻目に、櫂は片方のサーベルを投擲し、シールドの再生を一瞬、足止めする。

サーベルを投擲した櫂は、胸部を覆う鎧を棄て、それを蹴り、渾身の一撃をシールドを展開する左腕に叩き入れる。

サーベルの刃渡りの半分が左腕に刺さったかと思うと、櫂はそれを足場にし、上空に大きく跳躍した。

政幸も、後方に飛び退き、背部から櫂目掛けてミサイルを発射する。が、機体に大きな揺れが生じ、瞬間、発射したミサイルが機体のすぐ側で爆発する。

機体前面は軽くひしゃげて、側面は大部分が灼けていた。

ヴェルデが衝撃波を放ったのだ。

ヴェルデは振るった金棒を、そのままの起動で地面に叩きつけ、安定を失った戦機をさらに崩さんとし、叩きつけた反動を活かして大

跳躍。

辛うじて姿勢を正した政幸は、上空のヴェルデからの追撃を逃れようとするが、ブースタや後ろ脚が「強化された」泥に覆われ、動けなかった。

背部から左右に、包み込むように発射されるミサイルでは迎撃は間に合わない。そう悟った政幸は、左腕を高速再生、シールドを再展開しながら、右手のライフルを速射モードにし、連射する。

ライフルが爆音を上げ、弾丸が爆煙を生む。

だが、ヴェルデは金棒にてガードし、落下は止まらない。

そして、激突する。

シールドを展開する左腕で金棒を迎えるが、それが当然と言うように粉碎する。

胴体の左側の4分の1程を完全に破壊した金棒は、こちらも砕け去っていた。

「ちっ、くそおッ！」

苦し紛れに、ライフルを剣のようにし、叩きつけるが、奇しくも止められ、銃口を握り潰される。

その隙に、後ろ脚を解放し、ブースタをパージ、「二段目」のブースタを出す。これは、ロイから盗んだ技だ。

そうして後退した政幸に、新たな一撃が入る。

群穰がブースタ目掛けて蹴りを繰り出していた。

ブースタの機能は死んではないが、やはり起動にラグが出る。そこを狙うように上空から新たにサーベルを構え直した櫓が、戦機の頭部に目にも留まらぬ速さの連撃を叩き込む。

全体の機能を管轄する頭部を破壊された政幸の戦機は、その動きを無くしていた。

三人は次々にもの言わぬ戦機を破壊していく。政幸は、ボディに残された機体管理能力を頼りに、被害状況を確認し、現状の打破に努める。

破損状況、頭部100%、胴部33%、右腕12%、左腕89%、脚部67%、再起不可　と書かれたモニターを前に、どうにかできないか。

そう思って、しかしボディの管理機能も破壊され、間もなく引きずり出され、殺される。

そんな時だ。

更新されない筈のモニターに、見知らぬ紋様が背景に浮かぶと、また見知らぬ文字のようなものが数十秒、流れた後によりやく、理解出来る文字が浮かび上がる。

「是」

と。

文字は理解できても、内容は解らない。

3秒程迷い、考えると、モニターには「是」の周りに、取り囲むように、「否」の文字が溢れ出す。

政幸は諦観と、僅かな希望を探し、モニターを押した。

「是」

を。

「深紅」の光がモニターから現れ、軽率な、どこかのクイズ番組で流れそうな正解音が聞こえ、世界が、そう。

世界が変わった。

正八角形の、巨大なプレートが数え切れない程に現れる。

それはやがて、地球を覆い、飲み込む、大きな天蓋となり、政幸の乗っていた戦機が真紅の光と共に消滅する。

戦場に残ったのは、直径500メートル超級の深紅色の球体と、それを、所々に隙間を作りながら覆う白い八角形のプレートだった。

それは、腕も脚もなければ、ただコロニーのように浮かんでいた。地球を覆う天蓋は、陽光を完全に通さず、しかし淡い光を放ちながら、照らされる地球を見下していた。

政幸は、この訳が解らない、大きな、大きな力に怯えながら、狂喜していた。

世界を変えられるような、そんな力を入手すれば当然の反応であると言えよう。

政幸の脳裏に、新たな言葉が生み出される。

「変化？」 「是」 「否」

「是」だ。

すると、天蓋はつなぎ目から碎け散り、太陽を露わにさせる。

全てのプレートは光を跳ね返しながら、しかし、全ての光線は、威力を携え、呆然としていた三人を音もなくこの世から消し去った。

「すげえや！すげえよ！なんだこの力は！なんなんだよ！なんなんだよお！ハハハハ、アッハッハッハア・・・」

政幸は、高笑いの最中に気を失う。

遠退く意識の中で、新たな声を聞く。

『おめでとうございます。それが貴方の真なる戦機。貴方の力です。ですが、忘れないで下さい。その力は、一つ間違えれば貴方を狂わせ、世界を狂わせ、そして、』

『私との約束を、果たして頂けなくなりますから……』

アリスの、苦しみを堪えるような苦笑いを見た気がした。

憎悪、復讐、呪詛。そんな感情は、人の、セーブされた力を引き出せる。そんな力。

だが、大きすぎると、本人すら破壊する。そんな力。

感謝、感激、幸福……。

力を引き出す力は、負の力だけではない。

今度の力は、どちらだろうか。

知る由はあるだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7444y/>

縛鎖－バクサー

2011年12月31日17時49分発行